

<実践研究>

幼児を対象とした運動遊び教室の成果と課題

—領域「表現」の観点から—

渡辺敏明 信州大学学術研究院教育学系
友川 幸 信州大学学術研究院教育学系
桐原 礼 信州大学学術研究院教育学系

キーワード： 幼児, 身体表現, 運動指導, 親子

1. はじめに

2019年に実施されたスポーツ庁調査では、「幼児期に外遊びをよくしていた小学生は、日常的に運動し、体力も高い」ことが明らかとなっている（スポーツ庁, 2020, p. 21）。また、同調査結果の分析では、「幼児期に外で体を動かして遊ぶ習慣を身につけることが、小学校入学後の運動習慣の基礎を培い、体力の向上につながる要因の一つになっている」ことを指摘している。こうした幼児期における運動遊びの習慣化の意義は、「幼児期運動指針」においても「幼児期において、遊びを中心とする運動を十分に行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる」として指摘されている（文部科学省, 2012）。しかし、その一方で、子どもが自由な時間にやりたいことを調査した研究では、最もやりたいことについて、「男子では、4才を除くすべての年齢で、女子では7~18才の年齢で『ゲーム機、スマートフォン、タブレット、パソコンであそぶ』」であることが報告されている（野井, 2019, p. 28）。また、日本小児保健協会が実施した「幼児がよく行う遊びについて」の調査結果では、2000年の調査で62%であった「お絵かき・粘土・ブロックなどの造形遊び」が、2010年では、1位（75%）となるなど、体を動かさない遊びの割合が高くなっている（日本小児保健協会, 2011, p. 13）。このように、室内での遊びが増加していることについて、「幼児期運動指針」では、「幼児期における運動の実践は、心身の発育に極めて重要であるにも関わらず、全ての幼児が十分に体を動かす機会に恵まれているとはいえない現状がある。そこで、幼児の心身の発達の特性に留意しながら、幼児が多様な運動を経験できるような機会を保障していく必要がある」ことを提言している（文部科学省, 2012）。

上記で述べたように、子どもができるだけ早い時期から運動に親しむことや、運動遊びを行うことを習慣化していく機会を創出することの重要性が指摘されている。その一方で、スポーツ庁の報告書によると、「幼児が体を動かして遊ぶことを習慣化するためには保護者の意識が大きく影響する」ことが指摘されている（スポーツ庁, 2019, p. 23）。また、「運

動・スポーツの実施頻度が高い子どもほど、家族と運動・スポーツ、運動あそびを行っている割合も高い」ことが指摘されており、保護者の意識が幼児の運動の多寡に影響を及ぼすことが明らかにされている（笹川スポーツ財団，2019，p. 144）。さらに、幼児期の運動習慣の向上のための好事例を収集した調査では、幼児期の運動習慣の形成のためには、「保護者にも体を動かす楽しさの意識を高め、幼いころから一緒に楽しみながら体を動かす習慣に結び付くよう、働きかけることが大切となる」ことが指摘されている（スポーツ庁，2019，p. 23）。保護者にとっても、子どもと一緒に体を動かす楽しさを味わうことで、幼児の運動遊びや動きの習得に関心を持てるようになると考えられる。櫻木（2014）は、「保護者と子どもと一緒に楽しめる運動遊び」のプログラムを提供した事例研究において、「親子で一緒に身体を動かして遊ぶ取り組み」の有効性を報告しており、プログラム内で体験した遊びが、家庭で実施されるためには、遊びの内容や遊び方を工夫することが大切であることを指摘している。

幼児への運動遊びの提供のしかたについて宮内（2016）は、「幼児期の運動指導において、運動遊びを促すような物的環境を整えることはもちろんであるが、子どもが『やってみよう』と思うような遊びを提供することも重要である。しかも、その運動は幼児期の発達段階にとって適切で、しかも将来出会うであろう運動・スポーツと類似する運動経験となることが望ましい」ことを指摘している。また、杉原（2010，2014）は、幼児期における運動指導においては、指導者が決めた運動を子どもに行わせる体力づくり・スポーツ運動の一斉指導よりも、むしろ「子どもが自己決定的に行う遊びのかたちでの運動」、つまり「運動遊び」を提供する必要があることを指摘している。

幼稚園教育要領（2017）では、子どもの運動に関わる取り組みは、「健康」及び「表現」の各領域の中で取り扱われており、領域「表現」では、身体表現・音楽表現・造形表現・言語表現など、様々な視点からの表現活動が展開されている。これまでの研究では、領域「健康」の視点からの事例の分析は多数報告されているものの、「表現」の視点からの分析はその蓄積が十分ではない。

そこで、本研究は、幼児と保護者を対象とした「運動遊び教室」を実施し、「提供された運動課題の内容及び指導方法の適切さ」を評価することを目的とした。さらに、「表現」の視点から、子ども及び保護者の運動に関する取り組みの様相の変化を、「子どもの変化」、「保護者の変化」、「親子の関係性の変化」の3つの視点から分析し、「運動遊び教室」の実施の成果と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

2.1 研究の対象

本研究は、N県地方都市で実施された「親子運動遊び教室」に参加した幼児及び保護者を対象とした。教室は、同県内のスポーツクラブによって主催されたもので、2020年の10月に計3回、同クラブ内のスタジオで実施された。各回の幼児と保護者の参加人数と幼児の年

齢を表1に示した。普段の親子での運動遊びの状況については、「する」と回答したものは、13名(28.3%)、「ときどきする」と回答したものは、28名(60.9%)、「しない」と回答したものは、5名(10.9%)であった。

表1：運動遊び教室への参加状況

	1回目	2回目	3回目
参加人数	親子 16組	親子 15組	親子 15組
幼児の年齢	2歳児 10名 3歳児 6名	2歳児 10人 3歳児 5人	2歳児 5人 3歳児 10人

2.2 事前調査及びそれに基づく教室の実施内容の検討

本研究では、「親子運動遊び教室」における実施内容を検討するために、教室の開催前に、参加予定の保護者に対して、参加幼児の年齢、性別、就学前教育施設への就学の有無、「教室の実施において配慮してほしいこと」及び「教室に期待すること」について、自記式の質問紙によって回答を得た。また、これらの事前調査の回答について、質的分析を行い、得られた情報をもとに教室内で実施する運動について検討した。

2.3 分析の方法

「運動課題の内容及び指導方法の適切さ」を評価するにあたって、教室の実施後に、教室に参加した保護者を対象とした質問紙調査を行い、提供された運動が楽しかったか(「楽しかった」「普通」「あまり楽しくない」「楽しくない」の4件法)、幼児が一番楽しそうにしていた遊びは何か(複数回答可)、幼児が難しそうに感じていた遊びは何か(複数回答可)、運動遊びの時間の長さ(「とっても短い」「少し短い」「ちょうど良い」「少し長い」の4件法)、今後も運動遊び教室に通わせたいか(「通わせたい」「検討中」「難しい」の3件法)について回答を得た。さらに、「指導内容及び運営に関する感想や意見」、「運動教室に期待すること」についても自由記述式で回答を得た。

また、教室実施中に撮影したビデオ動画を用いて「印象分析」(マイネル, 1981, p. 127, 朝岡, 2019, p. 172)を行い、提供された運動遊びに対する子ども及び保護者の運動に関する取り組みの様相について、「表現」の観点に着目し、「保護者の変化」、「子どもの変化」、「親子の関係性の変化」の3つの視点から評価した。

2.4 倫理的配慮

本研究では、「親子運動遊び教室」を主催したスポーツクラブを通して、参加した子ども及び保護者に対して、参加受付の際に、教室参加に関わる安全的配慮、撮影録画の許可、得られたアンケートデータなどの研究への利用、個人情報取り扱いを含んだ説明を書面及び口頭にて行い同意を得た。

3. 結果

3.1 事前調査の結果

事前調査では、46人の保護者から回答を得た。回答内容と人数、得られた回答をカテゴリー化した情報を表2に示した。教室の実施にあたって配慮してほしいこととしては、「幼児に対する配慮・心配」、「保護者に対する考慮」、「安全面等への配慮」についての回答が挙げられた。また、教室に対する期待としては、「家庭などでの実施のための情報収集」、「運動不足などの解消」、「運動能力や意欲等の向上」、「子どもが運動を楽しむことへの期待」、「継続的な教室開講の希望」などが挙げられた。また、「親子教室に対する期待」や「交流や体験の機会の提供」といった、今回の運動教室のテーマである親子での運動機会の創出に対する期待が挙げられた。

表2：事前調査の結果

カテゴリー	回答内容	人数
幼児に対する 配慮・心配	落ち着いていられるのか心配	3人
	初めての場所など慣れるまでに時間がかかるかもしれません	1人
	靴を嫌がるので裸足で参加しても良いか	1人
	子どもは若い男性はちょっと苦手な様です	1人
	少し臆病になっていて運動教室に参加できていない	1人
保護者に対する 考慮	下の子ども(生後3ヶ月)を預かってもらえる体制を整えてして欲しい	1人
	母親が大きな力がかかる運動や激しい運動ができない	1人
安全面等への 配慮	安全面	1人
	マスクをできる限り付けてもらいたい	1人
家庭等での運 動実施のため の情報収集	家で(一緒に)遊べる運動を教えて欲しい	12人
	子供の年齢(発育発達)に合わせどのような運動をしたら良いか	2人
	教えて欲しい	1人
	兄弟で遊べることを教えて欲しい	1人
運動不足など の解消	音楽に合わせて体を動かすのが好きなので、リズム遊びなど教えて欲しい	1人
	保育園に通っていないので運動不足解消	2人
運動能力や意 欲等の向上	体を思いっきり動かして遊ばせてあげたい	1人
	運動能力向上に期待	1人
子どもが運動 を楽しむこと への期待	体を動かすことに苦手意識があり自信がなさそう、少しでも自信を持ってもらいたい	1人
	子どもの運動に対する意欲や積極性を見たい	1人
	子どもはかなり慎重派、初めてのものは進んでやりたがらない	1人
	体を動かすことが好きなので楽しみにしています	2人
	子供が楽しんでくれれば良い	2人
継続的な教室 開講の希望	楽しく遊んで運動できれば良い	1人
	本年度から定期的に通える教室にして欲しい	1人
親子教室に対 する期待	来年度から定期的に通える教室にして欲しい	1人
	今回は親も一緒なので楽しくできればと思う	1人
交流や体験の 機会の提供	他の子どもとの交流	2人
	家ではなかなか一緒に遊べないので参加した	2人
	普段遊んであげられないので父親との交流	2人
	一緒に遊べる機会を少しでも多く持ちたい	1人

色々体験させたい	1人
集団でのルールなど少しでも体験して欲しい	1人

3.2 「親子運動遊び教室」の概要

親子運動遊び教室は計3回実施し、1回あたりの実施時間は、90分であった。教室では、「親子のコミュニケーションを大切にしたい楽しい運動遊び」を約40分間、「発育発達段階を考慮した親子で楽しめるサーキット」を約40分間、実施した。なお、講師は20年以上の幼児への運動指導経験を持つ大学教員（1人）が行い、子どもへの体育指導を専門に学んでいる大学の学生（各回3～4人）が、指導の補助を行った。

教室で実施された運動の詳細を表3に示した。計3回の親子運動遊び教室は、ほぼ同様の内容で実施した。また、教室で実施する運動遊びは、参加者（子どもと保護者）が寄り添って座位で行える「手遊び」から始め、段階的に「親子体操」「用具操作」「サーキット」での運動遊びに取り組んだ（表3を参照）。

運動遊び教室で取り上げる運動遊びについては、「運動の適時性」を考慮して内容を設定した。マイネル（1981）は、1歳から5歳までの運動の発達を縦断的に研究し、幼児期に身に付ける運動の基本形態と運動組合せについて指摘するとともに、幼児期には多くの運動の系列が並列的に発達することを明らかにしている。また、体育カリキュラム作成小委員会（1980）は、大人が行う84の運動パターンはすべて6・7才頃までに習得されることを明らかにしている。一方で、幼児の基本的動作の習得の実態を明らかにすることを目的として1985年と2007年の幼児を比較した研究では（中村，2011）、2007年の5歳児は、1985年の3歳児相当の動きの質であることが明らかにされている。このような背景から、「幼児期運動指針」では、幼児期において獲得しておきたい基本的な動きについて、「体のバランスをとる動き（バランス系）」、「体を移動する動き（移動系）」、「用具などを操作する動き（操作系）」という3つの視点から整理・分類される28の動きの例を示している（文部科学省，2012）。また同様の視点から、吉田（2015，2016）は、幼児の基礎的運動パターンとして45種類の動きを挙げている。

本実践では、これまでの研究や報告で明らかにされてきた幼児期に身に付ける基本的な動きの知見に基づいて、2・3才の幼児に適時性があると考えられる運動や行い方を取り上げて運動遊びを構成した。その際、事前調査で得られた結果をもとに、「家庭でも親子で行える運動遊びを提供すること」を盛り込んだ。また、サーキットの運動遊びは、個人の発達や運動能力に合わせて運動に取り組めるように、「バランス系」「移動系」「操作系」の基本的な動きで構成し、動きの種類や難易度、バリエーションの違いのある運動遊びを3つの場に配置した。運動遊びには、子どもがやろうと思ってもすぐにできない内容や、子どもの能力可能性を芽生えさせる内容を持つ運動を取り上げ、自己決定する力を育てることや、運動のレパートリーやバリエーションを育てることを意図した。さらに、「おみやげ」として、家庭に戻ってから、親子で楽しめる運動遊びのきっかけとなるものとして、「ひも通し」をプレゼントし、家庭でも作れるバスタオルを用いたミニ平均台の作り方の紹介や新聞紙で作るボールの紹介を行った。

教室実施にあたって、子どもに対しては、「お話（説明）を聞く」「提示された運動遊び（課題）を行う」ことを促した。保護者に対しては、「各運動遊びはなぜ行うのか」という運動遊びの意図や発展可能性、「子どもの行う運動の何を見るか」という観察ポイントの解説を行い、運動遊びへの理解を促した。加えて、保護者に子どもをたくさん褒めてあげるよう促すことや、スタッフ全員で盛り立てるといった、肯定的な心理的支援を行うことで、子どもの自己効力感が高まるように働きかけること等を通して、親子が運動を通してコミュニケーションを活性化できるように配慮をした。運動遊びの課題（運動や行い方）を提示する際には、指導者が言葉やオノマトペでの説明に加えて身振りでも提示し、子どもと保護者で運動に取り組む方式を採用した。また、運動環境の設定上の工夫として、「使用する教材の色をカラフルにする」等により、色彩の知育を取り入れ、運動の習得のみならず、体と頭、心を育てることに配慮した。

表3：運動教室で実施された運動の詳細

時間	目的	内容	方法
10分	運動の場になじむ	●手遊び（手指を使った運動遊び） ①ひげじいさん、②いろんな2をつくろう（手をグーに握った状態から指を2本出す）、 ③グーチョキパーで何つくろう	親子で顔を合わせて手遊びを行う。
15分	親子のコミュニケーションの活性化	●親子体操（親子で行う運動遊び） ①バランス立ち、②ロボット歩き、③手の輪に入る、④滑り台、⑤ももに座ってユラユラ、 ⑥カンガルー（両足ジャンプ）、⑦いざり、 ⑧ジャンプ跳び越し、⑨トンネルくぐり、⑩くまさん歩き（四足歩き）	親子でふれ合い（スキンシップ）、コミュニケーションをとりながら運動遊びを行う。
15分	用具を操作する運動の経験	●用具を用いた運動遊び (1)ハンカチ（①背伸びでとる、②ハンカチ抜き、③ハンカチキャッチ） ※第1回のみ：フラップボールキャッチを実施 (2)風船（①木の実をとろう（ジャンプしてとる）、②投げ上げてとる、③風船ポンポン（弾き合う））	保護者は笑顔と拍手で出来映えを賞賛する。
10分	休憩		
40分	適時性のある運動の経験	●サーキット（器具を用いた運動遊び） ◆ブース1（2オスタート） ①平均台（直線）、②ケンステップ（両足ジャンプ移動）、③ケンステップ（グーパージャンプ移動）、④風船ポンポン	親子でコミュニケーションをとりながら様々な場を選んで運動遊びを行う。 保護者は笑顔と拍手

	<p>◆ブース 2 (3 オスタート)</p> <p>①平均台 (S 字: 小), ②マットで横転がり, ③トンネルくぐり, ④風船ポンポン</p> <p>◆ブース 3 (3 オスタート)</p> <p>①平均台 (S 字: 大), ②台からジャンプ (着地), ③トンネルくぐり (ハンカチ), ④風船ポンポン</p> <p>●おみやげについての解説</p> <p>●あいさつ・アンケート</p>	<p>で出来映えを賞賛する。</p>
--	---	--------------------



<図1 親子体操の様子>



<図2 用具を用いた運動遊びの様子>



<図3 サーキットの様子>

3.3 教室内で実施された運動内容及び指導法に対する評価

教室実施後、質問紙調査を行い、教室内で実施された運動内容及び子どもの変化について46名の保護者から回答を得た。その結果、46名(100%)の保護者が提供された運動について「楽しかった」と評価した。また、子どもが1番楽しそうにしていた遊びについては、回答数が多かった順に、「トンネルくぐり」が15人、「ジャンプ跳び越し」が10人、「風船」が9人、「サーキット」が8人、「平均台」が8人、「ハンカチとり」が3人、「グーパージャンプ移動」が3人、「マットで横転がり」が2人であった。全部と回答したものは2人であった。一方、子どもが難しそうに感じていた運動については、回答数が多かった順に、「平均台(S字)」が11人、「グーパージャンプ移動」が9人、「風船」が6人、「平均台(直線)」が3人、「ハンカチキャッチ」が3人、「トンネルくぐり」が3人、「フラップボールキャッ

チ」が3人、「バランス立ち」が1人、「くまさん歩き」が1人であった。また、運動遊びの時間については、「とっても短い」が2人(4.3%)、少し短いが1人(2.1%)、「ちょうどよい」が34人(73.9%)、「少し長い」が8人(17.3%)であった。さらに、26人(56.6%)の保護者が、今後も同様の運動遊び教室に通わせたいと回答した。

また、運動教室に習得を期待することについては、回答数が多かった順に、「将来の運動につながる動き」が11人、「体幹」が9人、「バランス感覚」が5人、「集中力」が4人、「楽しくできること」が5人、「興味・関心を見つける」が4人、「社会性」が3人、「自主性」が2人、「体力」が2人、「挑戦する意欲」が2人、「運動神経」、「柔軟性」、「協調性」、「自分で考えやり抜く力」、「不器用なところの練習」、「先生の話聞けるようになる」、「鉄棒ができるようになる」、「自信」が各1人であった。

指導内容及び指導法についての感想及び意見についての自由記述の回答を表4に示した。保護者から得られた回答を大別すると、「親子での参加及び活動への満足」を挙げたものが28名(60.9%)と最も多く、保護者は、活動終了時に親子で活動ができたことの喜びや、子どもが笑顔で楽しそうであったことを実感していた。ついで、教室で扱った内容について、「家庭での実践・活用」が可能であると感じた保護者が11名(23.9%)であった。また、教室への参加を通して、子どもをほめることの大切さを知ったなど、「子育てへの活用」を感じた保護者もいた。さらに、「子どもの運動能力の実態把握」につながったと感じた保護者もあり、子どもの運動機能面への関心が高まった様子が見られた。一方で、運営面では、運動時間の確保と同時に適切な休憩時間(水分補給の時間等)の設定の必要性や、子どもにとってなじみのある歌などを用いて子どもの興味関心を引く工夫、資料の提供なども今後の課題として挙げた。さらに、保護者からは、指導者や補助学生のかかわり方が評価されていた。

表4: 指導内容及び指導法についての感想及び意見(自由記述の回答)

カテゴリー	回答内容	人数
親子での参加及び活動への満足	親子で色々できて、とても楽しかった	28人
	子供が笑顔で(本当に)楽しそうだった	28人
	どれも新鮮でした。貴重な経験をありがとうございました	2人
家庭での実践・活用	家でもできることがたくさんあり、やってあげたいと思う	11人
	運動のバリエーションを教えていただき、すごく良かった	1人
	家でできる遊びだけど、非認知能力や身体の動きなど、具体的に教えて頂き新鮮だった	1人
今後の子育てへの活用	先生のお話も家庭で生かせる内容でした。勉強になりました	2人
	子どもをたくさん褒めてあげようと思いました(褒める大切さを知った)	2人
子どもの運動能力の実態把握	子供の運動のできなさを知る良い機会になりました	1人
	色々な運動を通して子どもの「できること」「好きなこと」	2人

	を発見できて良かった	
	子どもの運動機能面をもっと見てあげたいと思いました	1人
	もう少し動く時間が欲しかった	1人
	もう少しお茶の時間があればよかったです	1人
運営面・時間設定等での配慮	アンパンマンの歌とかを取りいれると子どもがもっと喜ぶと思います。	1人
	集中力がまだないので90分は難しかった	1人
	本で行った運動遊びをプリントにして欲しかった	1人
	生後6ヶ月までの子どもの預け入れについて検討して欲しい	1人
今後の教室継続の希望	このような教室を心待ちにしており、開設されれば絶対に通いたいです	1人
	未就学児がこのような遊べる場所がないので、大変興味を持ってました	1人
	先生の優しい話し方に引き込まれ自身も楽しめた	1人
指導者及び補助学生への評価	先生をはじめ生徒の皆さんがとてもあたたかく指導して下さいました	1人
	学生さんがたくさん褒めてくれて嬉しかった	1人
	学生の方にも丁寧に見ていただき、楽しかったです	1人

3.4 提供された運動遊びに対する子ども及び保護者の運動に関する取り組みの様相の変化

本研究では、「表現」の観点に着目し、「子どもの変化」、「保護者の変化」、「親子の関係性の変化」の3つの視点から、子ども及び保護者の運動に関する取り組みの様相の変化を分析した。以下では、ビデオ記録の情報を基に視点ごとの分析結果を示す。

(1) 「子どもの変化」について

教室の開始時においては、初めての場所で遊ぶことに不安感があるのか、子どもには笑顔が見られず、保護者に寄り添っている様子が確認された。最初の運動遊びとして、参加者に運動の場へのなじみを促すことを目的とした「手遊び」を行ったところ、保護者から運動への参加を促され、ぎこちない様子で手遊びに取り組み始めた。手をグーに握った状態から指を2本出す手遊び「いろんな2をつくろう」では、保護者と同じ指を出せたことを賞賛されて嬉しそうに笑う様子や、自分の考えるいろいろな指の出し方（バリエーション）を保護者に披露（表現）する様子が確認された。

教室が進行するにつれて、教室の開始時に保護者にしがみついたりして離れられなかった子どもも、親子で運動遊び（「親子体操」）に取り組む中で緊張が解れ、楽しそうに運動する様子が確認された。主な様子として、保護者からの賞賛に小躍りして喜びながら何度も挑戦している子どもの様子や、どの運動遊びに取り組むかを決めて保護者を引っ張っていく子どもの様子、子ども自身からも保護者にコミュニケーションをとり笑顔で楽しそうに運

動に取り組んでいる様子が確認された。「用具を操作する運動遊び」では、カラフルなハンカチを高く掲げた位置から落として捕る運動遊びが始まると大きな歓声が上がり、空中でハンカチを捕ることができた際には、保護者は笑顔と拍手で賞賛し、子どもは小躍りして喜びながら繰り返し挑戦している様子が確認できた。一方で、初めて取り組む運動遊びに少し戸惑っている子どもの様子も観察されたが、周囲の親子の動き方も参考にしながら取り組んでいく中で、徐々に戸惑いも取り払われていった様子が確認された。

教室後半に行った「器具を用いた運動遊び」では、少しずつ保護者から離れて運動に取り組む子どもの様子が観察された。また、運動の出来映えを保護者から賞賛してもらうことで自信を持てるようになったのか、より積極的に運動に取り組もうとする様子が確認された。その一方で、子どもの中には保護者の注意を引くために「課題を逸脱する様子（例えば、トンネルにぶつからないよう通り抜けるべきところを、故意に頭をぶつけて通る等）」も観察された。

子どもの観察からは、教室開始時に戸惑う様子が見られたり、動きにぎこちなさや力みがあったりしたものの、終了時には概ね動きの要領をつかんで力むことなく活動している様子を確認することができた。さらに、言語的な説明（指示）にも応じることができており、戸惑うことなく楽しく取り組んでいる様子が確認できた。

これらの観察から、子どもは運動の場に違和感や嫌悪感を感じることなく教室に参加できたことが示唆された。

(2)「保護者の変化」について

教室の開始時において保護者は、緊張しているのか笑顔が見られなかった。また、保護者は子どもの背後や横に座っている状態で、子どもと一緒に指導者の話を聞いているものの、子どもと対面して関わる様子はなかった。さらに手遊びを開始した場面でも、声を出して子どもを賞賛したり、拍手や笑顔で賞賛したりする姿は見られなかった。そこで取り組む運動遊びの発展可能性や、子どもが行う運動の何を観察すればよいのか、子どもにどんな賞賛が効果的なのかという点について、指導者から保護者に解説を行って運動遊びへの理解を促した。保護者は熱心に解説を聞くとともに、運動のポイントや観察の視点を伝えた際にうなづく様子から、運動遊びに学習内容があることを納得した様子がうかがわれた。教室が進行するにつれて、保護者自身が運動遊びへの参加を子どもに促す様子や、行い方を補足説明している様子、子どもを笑顔と拍手で賞賛して能動的に関わっている様子をほぼ全員の保護者において観察することができた。

保護者の観察からは、子どもに対する言葉掛けや運動を促している様子が頻繁に確認されたことから、保護者は子どもが取り組む運動遊びの課題（運動や行い方）を十分理解できていたことが推察され、家庭に戻ってからも取り組める理解度に到達していることが示唆された。

(3)「親子の関係性の変化」について

教室の開始時においては、子どもと保護者の両者において笑顔が見られず、お互いの能動

的なかかわり合いが少ない様子が観察されたものの、教室が進行するにつれて、子どもと保護者とのコミュニケーション(言語・非言語)が豊富に生み出されていたことが確認できた。

4. 考察

本研究では、幼児を対象とした「親子運動遊び教室」を開催し、「提供された運動課題の内容及び指導方法の適切さ」を評価するとともに、「表現」の視点から、子ども及び保護者の運動に関する取り組みの様相の変化を、「子どもの変化」、「保護者の変化」、「親子の関係性の変化」の3つの視点から分析し、「運動遊び教室」の実施の成果と課題を明らかにすることを目的とした。以下では、「提供された運動課題の内容及び指導方法の適切さ」と、教室の実施によって得られた成果と課題を3つの視点から考察した。

4.1 提供された運動課題の内容及び指導方法の適切さ

保護者を対象としたアンケートでは、参加した保護者の全てが「楽しかった」と回答し、ビデオ録画の分析の結果では、活動当初は「子どもの動きにぎこちなさや力みがある」ことが確認されたものの、活動の終了時においては、「概ね動きの要領をつかんで力むことなく活動している」様子が確認された。また、「用具を用いた運動遊び」では、カラフルなハンカチを高く掲げた位置から落として捕る運動遊びが始まると大きな歓声上がり、空中でハンカチを捕ることができた際には、保護者は笑顔と拍手で賞賛し、子どもは小躍りして喜びながら何度も挑戦している様子が確認された。用具を用いた運動遊びに取り上げた運動は、達成のフィードバックが明確であり、子ども自身も成功の可能性を感じられる適時性があったことから、もう一回もう一回と繰り返し挑戦する意欲につながったと考えられた。これらのことから、運動課題の理解と提示された運動の難易度及び適時性は適切であったと考えられた。

また、ビデオ録画の分析の結果では、「子どもが言語的な説明(指示)に応じている」、「戸惑うことなく楽しく取り組んでいる」様子が確認された。このことから、子どもにも運動遊びの課題(運動や行い方)が十分理解されていたと考えられた。この理由として本実践では、運動遊びの課題(運動や行い方)を理解してもらう方法として、指導者が口頭のみで課題提示するのではなく、動きの示範とともにオノマトペなどで動感(動く感じ)を伝えること、親子で取り組みながら繰り返し行うという手順を踏んだ。これらの指導上の工夫が、運動遊びの課題の理解に役立ったと思われた。また、用具を契機としながら親子が一体となって遊ぶことで、親子で成し遂げる喜びも味わわせることができたと考えられた。

さらに、教室後に実施した保護者アンケートでは、子どもが一番楽しそうにしていた遊びとして、「トンネルくぐり」、「ジャンプ跳び越し」、「風船」といった親子で取り組む遊びを挙げたものと、「サーキット」や「平均台」といった移動やバランスを伴う遊び、異なる難易度が設定された遊びを挙げたものが多かった。本実践では、親子で取り組める運動を多数取り入れ、さらに2・3歳の幼児に適時性があると考えられる基本的な動きから「バランス系」「移動系」「操作系」で構成し、運動の種類や難易度、バリエーションの違いのある運動

遊びを3つの場に配置した。このような親子で取り組める運動の設定、発育発達段階への配慮や、運動環境の設定の工夫が、子どもが運動を楽しいと感じることにつながったのではないかと考えられた。

加えて、提供した運動遊びの中では、子ども達の視覚を刺激するようなカラフルな道具を使用し、多様な動きを必要とする運動遊びを設定したことで、子ども達の興味・関心を維持させ、運動遊びを楽しむことにつながったのではないかと考えられた。また、運動教室に期待することについて、「将来の運動につながる動き」、「体幹」、「バランス感覚」、「集中力」、「楽しくできること」などを多くの保護者が挙げており、提供された運動遊びの内容は、保護者のニーズに合致した内容になっていたため、教室実施後の高い満足度の評価にもつながったと考えられた。

一方で、これまでの研究では、園内のカリキュラムや運動教室後などに、家庭で学習したことを継続的に実施することに向けた課題として、「年少や年中の時期から安心感や安定感を産物とする遊びを取り入れる」、「遊びの中で子どもへの対応の方法を親が分かるような働きかけを行っていく」ことなどが指摘されている（岡野，2018，p. 392）。今後の課題としては、保護者が運動遊びの実施上のポイントを正しく理解するための解説に加えて、気軽に家庭でも再現可能な活動にするために、子どもへの対応のしかたや実施した運動遊びの内容をプリントなどにして提供するといった配慮も必要であると考えられた。

4.2 「子どもの変化」の視点から

教室後に実施した保護者を対象としたアンケート調査の結果では、多くの保護者が、親子で活動ができたことの喜びや、子どもが笑顔で楽しそうであったことを実感していた。また、ビデオ記録の分析では、教室の開始時に保護者にしがみついたりして離れられなかった子ども達が、「保護者からの賞賛に小躍りして喜びながら何度も挑戦している様子」、「どの運動遊びに取り組むかを決めて保護者を引っ張っていく様子」、「子ども自身から保護者にコミュニケーションをとり笑顔で楽しそうに運動に取り組んでいる様子」など、教室の進行とともに変化する様子が確認された。これらのことから、今回の教室参加による運動遊びを通して、子ども達が課題達成の喜びを身体で表現することや、主体的にコミュニケーションをとって自分の感情を表現していくという経験を持ったことが示唆された。

4.3 「保護者の変化」の視点から

教室後に実施した保護者を対象としたアンケート調査の結果では、「子供の運動のできるさを知る良い機会になりました」、「色々な運動を通して子どもの『できること』『好きなこと』を発見できて良かった」、「子どもの運動機能面をもっと見てあげたいと思いました」といった、子どもの運動に関して保護者の意識や関心が高まった様子が報告された。これらのことから、教室への参加を通して、子どもの運動能力の実態を把握し、その実態に応じて関わっていくことの重要性を保護者が実感したことが示唆された。また、「先生の優しい話し方に引き込まれ自身も楽しめた」、「先生をはじめ生徒の皆さんがとてもあたたかく指導して下さいました」、「学生さんがたくさん褒めてくれて嬉しかった」、「学生の方にも丁寧に見てい

ただき、楽しかったです」といった、指導者及び補助学生の指導の態度に関する肯定的な評価が報告された。教室での指導の際に、指導者や補助学生が、参加者の取り組み状況を肯定的に評価し、活動の意欲を持たせるようなかかわりを意識したことで、活動に参加した親子が活動を楽しむことができ、また、教室への参加を通して、保護者が子どもを褒めることや関わることの大切さを実感し、子どもの運動への取り組みを肯定的に評価することの大切さを保護者が学ぶ機会となったことが示唆された。

4.4 「親子の関係性の変化」の視点から

教室後に実施した、保護者を対象としたアンケート調査の結果では、多くの保護者が、親子で活動ができたことの喜びを報告していた。さらに、教室で扱った運動遊びの内容について、「家庭での実践・活用」が可能であると評価された。また、「先生のお話も家庭で生かせる内容でした。勉強になりました」、「子どもをたくさん褒めてあげようと思いました（褒める大切さを知った）」といった、今後の子育てに関して新たな示唆を得たといった意見も出されていた。

これらの結果から、今回実施した「親子運動遊び教室」では、「親子がふれ合いながら行う運動遊び」や、「家に帰ってからも親子で再現できるよう気軽な運動遊び」を多く取り入れたことで、運動を通した親子のコミュニケーションが活性化されたり、子育てにおける新たな手掛かりを得られたりするきっかけとなったことが示唆された。また、「家庭等での運動実施のための情報収集」は、保護者が教室に期待することとして、最も多くの保護者が挙げていたことであったため、親のニーズを的確に捉えた活動内容の提示がされたことで、活動の満足度も高まったことが示唆された。

本研究では、保護者アンケートから得た情報と教室実施時のビデオ記録の分析によって得た情報を分析に用いたため、子ども自身が教室参加についてどのような成果や課題を感じたかについては、評価できなかった。さらに、教室終了後に、実際に家庭での運動の取り組みにどのような効果が得られたかは評価できなかった。そのため、今後の研究では、子どもを対象とした簡易的な聞き取り調査を行うことや、家庭での取り組みの様子を追跡調査することなどにより、より多角的な分析が必要になると考えられる。

5. 結論

本研究は、幼児と保護者を対象とした「運動遊び教室」を実施し、「提供された運動課題の内容及び指導方法の適切さ」を評価することを目的とした。さらに、「表現」の視点から、子ども及び保護者の運動に関する取り組みの様相の変化を、「子どもの変化」、「保護者の変化」、「親子の関係性の変化」の3つの視点から分析し、「運動遊び教室」の実施の成果と課題を明らかにすることを目的とした。その結果、提供された運動課題の内容及び指導法については、親子で取り組める運動の設定、発育発達段階への配慮や、運動環境の設定の工夫がなされたことにより、子ども達の興味・関心を維持させ、親子ともに運動を楽しんでいることのできる適切な内容と方法が提案されたと考えられた。また、運動遊びを通して、子ど

も達が課題の達成の喜びを身体で表現することや、主体的にコミュニケーションをとって自分の感情を表現していくという経験を持ったことが示唆された。加えて、保護者においては、保護者が子どもを褒めることや関わることの大切さを実感し、子どもの運動への取り組みを肯定的に評価することの大切さを保護者が学ぶ機会となったことが示唆された。さらに、親子の関係性についても、今回実施した「親子運動遊び教室」では、親子がふれ合いながら行う運動遊びや、家に帰っても親子で一緒に行うことのできる運動遊びを多く取り入れて提供したことで、運動を通した親子のコミュニケーションが活性化されることや、保護者が子育てにおける新たな手掛かりを得るきっかけとなったことが示唆された。

引用参考文献

- 朝岡正雄 (2019) 指導者のためのスポーツ運動学, 大修館書店.
- 岡野昇, 加納岳拓, 上山浩, 山田康彦, 辻彰士, 前田幹夫 (2018) 継続型の親子運動遊びに関する実践的検討 -「親子遊び手帳」の作成を通して-, 三重大学教育学部研究紀要, 69, 383-394.
- 笹川スポーツ財団 (2019) 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2019 -4~21歳のスポーツライフに関する調査報告書-, 笹川スポーツ財団.
- 櫻木真智子, 太田よし美, 西田ますみ, 梁川悦美, 桐川敦子 (2014), 「親子で楽しむ運動遊び」の実践が子どもと保護者に与える影響に関する報告, 聖徳大学研究紀要 聖徳大学 25号 聖徳大学短期大学部 47号, 143-151.
- 杉原隆, 吉田伊津美, 森司朗他 (2010) 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係, 体育の科学, 60(5), 341-347.
- 杉原隆, 河邊貴子 (2014) 幼児期における運動発達と運動遊びの指導, ミネルヴァ書房
- スポーツ庁 (2019) 平成 30 年度スポーツ政策調査研究事業 -幼児期の運動習慣向上好事例調査-.
- スポーツ庁 (2020) 令和元年度体力・運動能力調査結果の概要 (調査結果の分析).
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1421920_00001.htm 最終アクセス日 (2020年11月22日)
- 体育カリキュラム作成小委員会 (1980) 幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究 I :カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について, 体育科学, 8, 150-155.
- 中村和彦, 武長理栄, 川路昌寛, 川添公仁, 篠原俊明, 山本敏之, 山縣然太郎, 宮丸凱史 (2011) 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達, 発育発達研究, 51, 1-18.
- 日本小児保健協会 (2011) 幼児健康度に関する継続的比較研究 : 平成 22 年度 総括・分担研究報告書.
- 日本発育発達学会 (2014) 幼児期運動指針実践ガイド, 杏林書院.
- 野井真吾 (2019) 子どもが自由な時間にやりたいこととは?, 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2019 -4~21歳のスポーツライフに関する調査報告書-, 笹川スポーツ財団,

28-32.

マイネル, K (金子明友訳) (1981) スポーツ運動学, 大修館書店.

宮内孝 (2016) 幼児期の基本的な動きを身につける運動指導のあり方, 南九州大学人間発達研究, 6, 23-30.

文部科学省 (2012) 幼児期運動指針.

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm 最終アクセス日

(2020年10月31日)

文部科学省 (2013) 幼児期運動指針ガイドブック.

文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領.

吉田伊津美 (編著) (2015), 幼児の運動あそび, チャイルド本社, 16-17.

吉田伊津美 (2016) 幼稚園の運動遊びおよび小学校低学年体育で観察される基礎的運動パターン, 発育発達研究, 70, 48-54.

(2020年11月30日 受付)

(2021年 3月 4日 受理)